

## 4. 唾液腺筋上皮腫の組織学的および免疫組織学的研究

### はじめに

唾液腺に発生する筋上皮腫は稀な腫瘍であり、多形腺腫と密接な関係にあるとされている<sup>1)</sup>。またその組織分類に関しても現在なお論議のある腫瘍である。われわれはWHO分類に基づき、1961年～1994年の33年間に唾液腺病変780例中、4例の筋上皮腫と1例の悪性筋上皮腫について病理学的に検討を行った。

### 材料および方法

長崎大学医学部附属病院で手術をうけ、摘出された標本から筋上皮腫と組織学的に診断された5症例を用いた(表1)。摘出材料はホルマリン固定後、光顕、免疫染色の試料を作成し病理学的検討を行った。

### 組織学的所見

悪性筋上皮腫と診断された症例5を除き腫瘍は線維性の結合織に被われていた。増殖形態は大部分が充実性の増殖を示していた。増殖している細胞形態は形質細胞様細胞と紡錘形細胞がそれぞれ1例であった。他の3例は上皮性ないしは明調細胞からなっていた。症例4では腫瘍細胞に多形性がみられ、平均0.5個/10強視野の核分裂像を認めた。症例5は胞体が広く、明瞭な核小体を有する濃染性の核からなる類円形の腫瘍細胞で構成され、核分裂像も平均4個/10強視野みられた。さらに壊死や浸潤性の増殖像もみられ明らかに悪性と診断された。胞体内のグリコーゲンは症例5にのみ見られた。

### 免疫組織学的所見

5例ともS-100蛋白は陽性であった。 $\alpha$ -smooth-muscle actin は症例2, 4, 5で陽性であった。ケラチンは症例1の一部の多角形の細胞と症例5で陽性であった。

### 考 察

筋上皮腫は多形腺腫と関連がある腫瘍として報告されている<sup>1)</sup>。我々の症例では発生年齢は平均45歳で女性に多くみられ、多形腺腫の年齢分布、性差などと類似した。また筋上皮腫は耳下腺に好発すると報告されている<sup>2)</sup>。われわれの症例でも耳下腺が3例で最も多く、小唾液腺由来と考えられる軟口蓋や上顎洞がそれぞれ1例であった。

筋上皮細胞は上皮性および間葉系の性格を有しており、腫瘍化した筋上皮細胞は上皮性あるいは間葉系の性格、あるいは両者の特徴を有することが報告されている<sup>1)</sup>。我々の症例でも免疫組織学的にS-100蛋白が全例で陽性で、ビメンチンや $\alpha$ -smooth-muscle actin およびケラチンに陽性の症例などがみられ、腫瘍化した筋上皮細胞として矛盾しない腫瘍と考えられる。

原発性筋上皮腫は多形腺腫から発生した筋上皮腫に比べ浸潤性であると報告されている<sup>2)</sup>。われわれの症例で症例3, 4は再発を繰り返している。組織学的には2症例とも上皮性細胞からなり、症例4では腫瘍細胞の多形性と少数だが核分裂などもみられた。一方、悪性の筋上皮腫は非常に稀な腫瘍で、良悪の判断が容易でないとして

いる<sup>2)</sup>。組織学的には細胞異型を伴い核分裂活性が増し、浸潤性の増殖形態を示すとされる。悪性筋上皮腫の核分裂像は2～8/10強視野の報告がみられる<sup>2)</sup>。症例5は浸潤性でリンパ節転移がみられ悪性は明白であり、核分裂は平均4個/10強視野みられた。悪性筋上皮腫の診断に浸潤性増殖や転移などとともに強視野での核分裂数の多寡は重要と考えられる。

(本研究は病院病理部との協同研究である。)

## 文 献

- 1) Dardick I et al. Myoepithelioma-New concepts of histology and classification: A light and electron microscopic study. Ultrastruct Pathol 13: 187-224, 1989
- 2) Palma SD et al. Malignant myoepithelioma of salivary glands: clinicopathological features of ten cases. Virchows Arch [A] 423: 389-396, 1993

表1 筋上皮腫の臨床所見

症例	年齢/性	発生部位	転 移
1	45/女	軟口蓋	(-)
2	66/女	耳下腺	(-)
3	22/女	耳下腺	2.8年*
4	77/女	耳下腺	5, 17, 22年*
5	45/男	上顎洞	下顎リンパ節

\* ; 再発

- 1) 5例中4例が女性であり発症年齢は平均45±19歳(14歳～66歳)であった。
- 2) 発生部位は3例が耳下腫で軟口蓋と上顎洞にそれぞれ1例みられた。
- 3) 初回の術後再発のみられたのは2例であった。症例3では術後、2年、8年後に、症例4では術後、5年、17年、22年後に同部位に再発がみられた。
- 4) 症例5は鼻閉や鼻漏の症状で腫瘍は上顎洞にみられた。手術後、顎下リンパ節に移転がみられた